



近世名家書畫談二編

一



近世名家書畫談

二編全四冊

甲辰夏

雲烟子著并梓



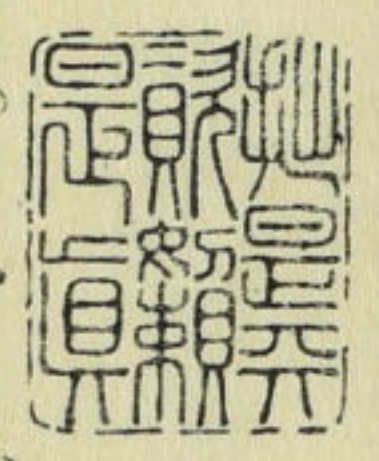
素質為
能自潔
秋香冉
待風吹

藝生

近人之好古書畫。唯觀之。其是也。求
 耳。至其剝蝕者。無若落款者。與此者
 不顯著。則雖尤物。亦不如此。嗚呼
 此風一長。流者日就。真者日湮。而
 後世終將不能窺古人之精神。豈
 不亦哀乎。余乃不自揆。為著此編。
 救其弊。并於萬分之一。因所播山先
 生。字蓮。以弁卷之首。亦所以見拾珠
 玉於泥中。之意也。甲辰冬
 胡安西於慈溪



書畫談續編序

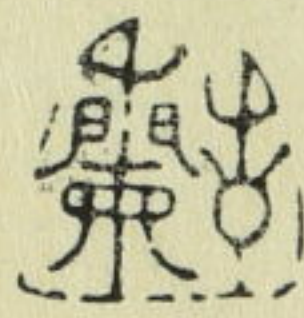
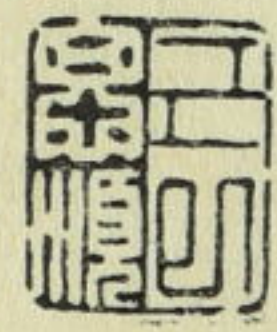


王逸少嘗謂。年在桑榆。彩絲竹
 以陶寫。此之濼矣。文彩了。色之
 娛。唯顏能表暮。事之或可也。然
 猶為危險焉。况如強壯。假之為
 適。其不伐性自天。以玉滿。力。之。度。
 可弗悚。然。素。勤。業。之。士。鵝。好。學。

學。年為母。復心力。獎矣。里一。口。間。
以。盈。源。產。煩。抑。者。惡。乎。寫。也。
必。求。曠。襟。爽。懷。惟。一。室。清。林。之。
焚。香。滄。茗。法。古。名。畫。交。互。展。
觀。有。此。靜。好。耳。是。乃。尚。古。
人。子。載。之。且。為。過。之。其。樂。果。
何。如。哉。安。西。雲。烟。生。少。嗜。出。壘。

既深於法。當述其所。得。刊布之。
吾人爭觀。以。後。今。出。餘。蘊。囑。余。
其。氣。因。翻。閱。如。次。崇。通。以。高。
刷。暖。余。劫。起。文。尾。今。老。多。如。得。
掃。一。室。玩。圖。去。優。游。終。餘。年。
是。為。教。亦。善。耶。免。於。大。考。之。
嘆。何。必。頂。骨。之。輕。然。為。竹。節。之。空。

烟以冊視之。凡塵膝授。泥瀾石
利。法而不及。徒坐非醒。疾之
禁方仙丹也。非是為教。發印
嘉平月。程松老朽。誤月舟之人
筆于後。孫之小意。



書畫談續編序



作書畫難矣。然不若鑒書畫之最難也。
何以言之。凡作書畫者。筆墨必良。縑素必
佳。而又有粉本法帖可以依擬。研石猶披
堅甲執利兵以臨乎陣。是以拙工劣伎。
亦或有奏其功者矣。至鑒書畫則不然。
蓋天下古書畫之夥。紛々紜々。不可勝窮。

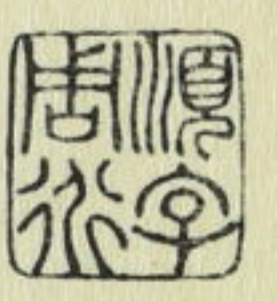
而玉石混淆。真偽雜然。其所恃以鑒之。則唯一雙眼孔而已矣。此如夫有粉奉法帖可依據也。是猶挺單身奮空拳以當百萬之敵。自非有得神機。豈能免于挫衄乎哉。吾友雲煙主人長手賞鑒。其於真偽。慧眼如炬。一睨無所逃。余嘗出家藏數幅。覆歛通印。使其鑒之。片言奇中。

百不謬一。嗚呼。雲煙之得神機。誠可畏已。宜乎其以此伎馳藝苑。而吾一人交鋒爭衡者也。往年雲煙泄其所得。撰名家書畫談二馬。其談奇拔。其論精確。能使讀者厥角稽首。而英悍之氣未艾。今又著續編四卷。其造詣之深。闡發之微。較之前輯。殆有加焉。謂之賞鑒之堅甲利

兵。不_二亦可乎。夫甲兵之於神機。相去遠矣。然其堅利者。能使人勇武。則此編之出也。一安知_レ無_下依援以馳騁藝苑衝突文陣者不興哉。余請張膽而俟之。

天保十五年甲辰抄秋訕菴外史大橋

順撰



鼎齋生方寬書



近世名家書畫談二編卷之一目次

- 大意
- 鑑定論
- 半鑑の論
- 學者鑒定を誤る事
- 書画好小異同阿る事
- 蘆山紫山書榮悴の事
- 妙語時小不遇事
- 圖樣雅俗好の事
- 和歌連俳作意好嫌の事

附茶論



- 墓碣碑帖の事
- 真蹟の劣墨刻小勝る事
- 書画臨寫可謹事 附裝潢字義

近世名家書畫談二編卷之一

雲煙子 安西於菟編次

大意

唐羊士諤の句ハ小畫披靈物態書見古人心ト是書畫
 愛玩の真訣ト少ト餘事ト共ト語ト一トハ蓋ト書畫ハ
 六藝の一ト最上乘の好事トなり故ト古人ト無聲
 詩養心術トと云ハ自ら書画ト作ル者能ク體認セズバあ
 るトハ又惣トて文辞トふあづクるト其ト此意ト越知ルが野鄙トふ
 温雅の趣ト越得ル故ト唐土の文士名家大家共ト皆此技
 小工トなり然レ共見地ト無ク此技トのト小耽ルが却テ薄俗トとあるト

素より君子に近き遊戯よて儉樸の多の^一こなきは能く其
道哉知る時ハ此好事小勝りける清娛何んや小人を
閑居して不善小入り富足の身哉をて安逸小居まば
酒小耽り色小溺ま竟小ハ性命哉短宿るも自然の勢
あて此道ふるよりなき故あり此清娛哉以て小人富
有の身の淫樂哉防ぎ君子の正道小誘小便りとな
さんとは可なり必自餘の骨董女妓猾の業と共小語る
ことなきのる^一

鑑定論

前編既小堅定の事哉論して宋湯屋が觀画六法

乃ことを舉ぐ又夏文彦の看畫の法を録すその條小
燈下小畫哉看る處うらむと云り是唐土文人看画乃
規矩小して尤かくあるべきことなり志の^一共 我邦を
惣て辨給小掇何くと哉常とよる風ありて是而已小
て毛鑑定の肯綮哉あやま孰所あり高陽山人の言小
學識あき目利定まらむと云ふこと又學何る故小
疑所ありて害となることもあるなり唐土ハ南北共小
文人多くして畫意おのづから文意あり 我朝ハ文
人ハ文人畫家者流ハ画家者流各別なるゆ和漢
雅俗小徹底する小何らざるもハ觀る處うらむ寸予前編

或述一時ハいま此業ハ入るるに及ばずして學者の説の如
 信ぢり今既ル業ハへりて累年頗る切磋の功或積
 多る小学者の説の如く小を據るるに及ばず又多く看る
 小を阿るるに及ばず能手の贋と拙作の真とハ實ハ毫髮の
 多る小口舌ハ説きざく真の真なるもの贋の贋
 なるものハ一目瞭然として鑒者或するに及ばずこれを
 以て鑒定ハ實ハ一大事なりこゝル又一説あり鑒定
 家而已尔阿るるに及ばず萬事衆人より挙る時ハその言千
 里の遠きハ達す然も其業の能と不能と他人
 知らばその業ハ居る者ハ自然と知ることあり其業ハ

妄鑒を共尊崇の人これを用ひて愚者ハあつて
 信じて瓦を玉と玉を瓦とと真鑒といふ時ハ遇さば璞
 璧を瓦石と棄るる世ハ耳食と云ふ阿るる古人所謂
 耳或貴ぶの弊除きざく又精鑒ハして真を贋と
 觀るあり漏鑒ハして贋或真と觀る有り何ぞも精
 鑒といふに及ばず一多る贋の真となりて其の精鑒
 小ありて贋と定まるありを阿るるに及ばず真物の妄鑒ハ
 遇して玉を瓦と愚者ハ捨るるに及ばず至寶の泥中ハ
 埋没して顯さざる多る是ハ書畫の如く小ありて世
 上の事小にして皆然り近世ハかりに及ばず上古も鑒

家小人物の偽有りこれハ天地造化の贋作と云ふも
 目力試人小誇りて世人小一隻眼あること試知らざる常
 小疴氣有りて我意小随て真を贋と贋を真と
 一系意小合はざる人ありて乞ふ時ハ真蹟小批難を
 くよる小いり或ハ束脩の用意小よることなど此類皆
 人物の偽ありて人道小何ぞ書画の偽物よりモ又
 甚一かりあるかのごとく妄人ある由一ハ真蹟の亦小埋
 毛未贋作の至寶と云ふこと実小歎かはしきことな
 る也予かくよと病狂喪心小ハ何ぞ又按小文徵明
 先生の贋蹟を以真物なりと云ハ一類ハ君子の心

術を見る小是ま
衡山先生 鑒識小精一ウラミハ吳中の人々其鑒定
 を求る小贋物を以真跡と云て流るるを多ク一
 此邦を採幽永真をどの鑒識をばくる
 小実小大名をなむべき人の所為なり畠山牛菴古筆
 了佐まこれ小准む此輩ハ真を見て偽となす小
 量の人小ハあざるなり

半鑒の論

己を鑒者なりと思ふ人小不鑒なる者多しと云ハ
 治世小生まざる人兵学を好む攻城野戦の法を
 暗記して我を勝敗存亡の機を得と云と思ハる
 類なり昔戦國の時趙の國小趙括といふものあり

若年より兵法を學びて天下小己小勝まざる者なりと
 思ふ阿る時趙王是を用いて大将と一秦の國と戦ひ
 一小勝と成得ば軍大い小破まじりて是兵家の
 之小あつむ萬多亦志り醫師が論をよくして療治
 を能せざる相撲手技よく知りて勝とを得ざる
 同一書画も時代傳記を知り或ハ花幅を小收置て
 鑑定真贋の所小つりてハ愚蒙なる人阿る是性の
 志のつりむる委小して學びても至り難きや此小
 先生と崇めらる時ハ鑑定を乞ふ人あり極て已まが
 意を以て門弟子小示す由一果して誤ること多し

人の收花の真贋を辨ぐるハいと安きことなり已まが收
 花小せんと思ふ時ハいとるるを以て鑑を極きこと
 あり又ある鑑者ありとかく印章の事を論じて真跡
 ある紙も贋なりといふさ迷ども絹統の類小押しときハ
 装潢の仕方小より斜恣小なることあり又印色の
 善悪毛種の小薦席の小ちを以て織洪の多小い何
 きバ印のありき小て贋と定まらざる小何むかざる鑑
 家ハ印章なる小その小つりてハ觀ることを得づらむ
 上古ハ落款小ること少し骨董刀劍のごとく無名小
 て賞鑑するハいつぞや當世利の爲とあり亦小吠

其の徒のまて何そびとあるもの事ある故小無款むくてハ
 通用遠くありつうようとをこそ何き傳つたりき故小古画こが今画いまが共
 小無落款むくまのハ商家の手ても印いんを摸造もぞうしおる
 其のまも多し是等ハ印いんあり共真跡まじしなりどと
 画がくびとく席上せきじやうの兵法へいほう畠水はたけみづ練れんの徒との鑒識かんしハ大半
 右みぎの類いあり志しき共又難がたきこと小もあど又易やすきふ
 何なにと樂たのむまのハおのづから會得えとくし
 予より友素原善ともすげん我われ一則いつそくを示しめて曰いは夢溪筆談むせきひつだんを聞き
 る小書画しょうがを論ろんじて云い藏書畫者ざんしやうが多取空名たしやくうな為鍾王しゆんおう
 顧陸之筆こんとく見者爭售けんしやう此所謂耳鑒こゝ所謂耳かん又有觀畫こゝ有観が而以手をて

摸之相傳以為色不隱指者為佳畫此又在耳鑒
 之下謂之揣骨聽聲こゝ下こま當時書画を鑒定かんていする
 者の状じやう和漢わくわん回くわい一いつなること見けんるべし揣骨聽聲ちゆうこつていせいハ所
 謂書画の形容を以て鑒識かんしするその是なりこそと
 より論ろんあり世間よかん多おほく耳鑒みみかんありて眼鑒がんかんはくなく
 眼鑒がんかんあり共亦神鑒しんかんあり其その我われ書画しやがの一小いっしょうあり
 何なにと猶なほくのごときこと

學者鑒定を誤る事

書画家しやがが儒醫歌誹諸家にういとかはいしよが者流しやうりゆう各おのの先軍せんぐんの遺墨いんぼく試
 觀けんて真偽しんぎを誤あやむるあり是ハ無益むえきの論ろんなりと思おもハる



牽演



雲之福真之治
 鏡之其其其
 心之其其
 叔翁百中之百
 其其其
 為境海者境

先鑒家と好事家との別なること我知るべし知之者
 不知好之者好之者不知樂之者と之バ其道なるて
 能く知るべきふあふて初年晩年中年の迷ひあり
 或ハ結構の常ハ異るあり又ハ席書或ハ臨書ある見
 る所小よりの揮毫或ハ蘭醉の筆跡千變萬化な
 り系書と之ども十年前小一ハ我書とを思ハ迷ぬ
 ことあり又他人ハ我書小做つて書くるを見て実ハ我
 書なりと名ふともあり書画成なるものハ已まら量
 の外ハ觀ること成得るらむと鑒定家ハ是を樂し
 こと道を道とてくらをを用る由一ハよくその變化成

知るふいふこと固よりあり今時高名なる老儒先生ハ
 り其門下の書生常ハ古人の書を得て先生ハ鑒定
 乞ハ先生云予歎る書画を花貯はまじも他の真偽
 を辨ぐるふいふこと誰何某ハその道を得て能く真偽
 成識る彼小見せて定免しめて可なりと是その業の
 大ひなるまら諸家の僻論を思ふその人の書まじ
 文字あまじバ真なるをを贋なりといひ其詩文の面々
 き小會ハ贋なるをを真なりといふあり由一ハ贋作
 をなす者此表をさとりて又能く狡謀をなす贋
 成肆ふまらふいふこと

して別条なりしとぞ文字知自慢小命をてんと
 する者あり本草を覚（さ）て共（そ）の毒（どく）試（し）解（げ）とこと
 を知り多る者あり是書画のこと小何（な）と（さ）茶話
 の一笑小傳（べん）べり鮭（さ）の河豚（わ）なることハ論衡（ろん）炮炙（ほう）論（ろん）杯
 小見（み）一多（た）ことなり志（し）共（そ）バ書論（しよ）画論（わ）を知りありと
 書画を見ることハ不識（ふ）の書画屋（しよ）小元（げん）及（じつ）バ（さ）る（る）
 或ハ博識（はく）を自負（じ）する人ありて多（た）く書家（しよ）小あ
 てハ書論（しよ）を難（なん）ト画家（わ）小會（かい）てハ畫論（わ）を問（もん）ふ人あり
 共俗（きよ）小云（い）半可（はん）といふ者ありて華墨（わ）を執（と）てハ豈（あ）尋常（じん）
 の書画家（しよ）小元（げん）及（じつ）バ（さ）る（る）也

書画好小異同あり事

世人の珍賞（しん）する物先儒流（しよ）といふ惺窩（せい）羅山（ら）丈山（ぢやう）舜
 水藤樹仁齋（じ）祖來（そ）の諸先生（しよ）を初（はつ）とて人（じん）舉（きよ）て寶（たう）
 とて志（し）共（そ）學風（がく）のことなるハその流派（りゅう）小よりて違（ちが）り
 物学（ぶつ）を學（まな）ぶ者ハ閻（えん）齋（さい）學（がく）を呵（か）も閻（えん）密（みつ）學（がく）を（ま）る（る）共
 ハ祖來（そ）を誹（ひ）る是（こゝ）世（せ）上（じやう）の常（じやう）あり志（し）共（そ）廣（くわう）く儒流（じゆ）
 を好む人其差別（さ）なくその好品（こう）小會（かい）ハ買取（かい）て挿架（さう）
 とん（とん）共（そ）ハ尊奉（そん）とハ（と）又好事（こう）の玩弄（わん）あり（る）画（わ）
 或ハ堀川（くわ）派（はい）ばりを好（こう）まあり物派（ぶつ）小あり（る）をよ（よ）ふ
 あり是ハその門流（もん）を學（まな）ぶ者の收（しゆ）花（か）なる所（しよ）あり其（こゝ）

他諸家者流皆かくのごとくその内儒流も奇跡稀ふ
して茶家の玩弄も遠く徇流も清巖江月翠岩
をど人の尊ぶる皆茶人の用とせざるを多し其餘蘂山ハ
お置月舟山盤珪無難桃李白隱遂翁惠南師ホ
各高僧も奇蹟ある人をば茶家の珍賞とせし物
なき共その時小遇はさばば花をば者稀なり思ふハ
世間の考も吠る遺墨をば俗家のものと免ふ合さるハ
その奇蹟を穿鑿せんて人の志さざる故なりまて
茶家の玩弄も遠く奇跡遊戯ももて人の善
を称し徳を挙功状歎し奇を讚し已まらば古人ハ

劣るまて人を善し進むとせざる心あり多きもの
ぞ一実も真の好事者稀なるが故も亦ふらば
物の出ること遠く世人のまてはれ品の中も又とれ
るものも好むことハなり故も真の重寶とな
るもの少く世間通用の浅薄のものも高價もなる
事とハなる

蘂山紫山書榮悴の事 附茶論

禪家の高僧蘂山紫野の二派今時榮悴の勝劣をい
先黄蘂ハ隱元木菴即非南源高泉悦山哉始して
墨池家も獨立曼公大鵬唱浪道本を各千里の

波濤を越 本朝小帰化して道德高きものありて文
墨を以て兼具をりて此諸賢の本邦小来る小ありて
只手跡のこ船来をいふるの好品とすきや大徳寺派
みていをも一休澤庵ハ性密達ふて凡小超ありその余
春屋玉室玉舟春澤江月清巖翠岩江雲江雪天祐の
輩得道の浅深ハいふあるやあつて床頭小掛屋き能書
を見む志多共利休宗旦古田金森小遠公などの
茶人皆此紫山小参禪キ故おのづから茶道小も達
せしむと見ゆ故小世の茶家専ら是哉貴んで今
茶も小與らざる人をもきよて賞する様小ありて

書跡ハ亦稀なり予書画を嚮を業として藥茶二山
の書跡の遇不遇を見る小玉ハ埋もせて瓦の貴むる小
似たりかくいふを予嘗て茶意を知むべしといふり
何れも甲小常今の茶ハ古道小よる茶小何れも別小
一種世事應接の茶とありあるやうなり器物ハ寶く
らんとあり書画ハ事實傳記を去るむとて只人の耳近き
を尊む或ハ詩文の長くして解をざるハ客小失禮なり
として俗用の書画を用るなどさう小雅事を尚小習氣
なく一種の後世茶の湯ハ多しと見えたり茶事の原
始を尋ねバ俗意めてハ出来ざるといふあり

茶ハ元來道を學ぶ者書を讀座禪をもる小睡魔
 の侵ををさるんが為小喫せーを知識のころ小より
 茶ハよく禪を小かきひつるとして専ら禪機小より
 式法を定免即悟道の一助とせーなり然るより
 翫弄とありて東山殿の比益盛小なりハ専ら玩
 古の為のこりて既小驕奢の意を生じ是が為小天
 下の古器古董書画をこりて集め多しひりあり
 是ぞ是利家衰微の基とありこれハ心得あるべき
 ことありその後天正慶長の比ハ太閤殿下の機謀小
 よりて軍事の用とありハ其極小至りてハ利休を

罪をるその思慮いふあり今太平鼓腹乃
 代小ありてハ主客尊恭の禮儀とありその時小
 志こりてそまじく用をなむと禪意も背の
 ぞと云ふハ一さま共玩古の用多る時ハ浮費夥くし
 て驕奢の害を生じ軍事の用多る時ハ疑惑の害生
 じ尊恭の礼多る時ハ佞媚の害を生じ又貪
 欲の害ハ各三つ小通じてまぬれざるなりそまじこれ
 を禪家小用まじバ大小悟道の助とあると云ハ我
 小して用る故あり京師の人ハ能く儉約のこりて
 是を用るといハ是ハ土地の風ありて無益の酒食小

代えてもちゆるなるべし。又是禅意の去りしむるころ
 ふして全く害のこふも何れも江月清巖の書幅何の爲
 小掛と云を去るべし。今世の茶人とかく珠光利休の
 輩をたづなりしむるころそ多々違ふ。茶意の古道は
 二さすのハ掛幅もも茶人の書画の外ふ何れも一ハ
 千年丹頂鶴。萬歳緑毛龜。などの語を書くもハ禅意ハ
 面白くもさす。茶席小用を画も又是小同。又儒者の
 書あり共宋儒の径語或ハ李杜の詩句など書くもハ
 禅意小合ておそし。ろく掛て用あり。當今ハ其用由
 魚子紙捨て捨べきを用ゆ。是ハ故事より茶を崩し

茶より故事乃意を崩し。茶の茶多ることを去る故
 事の故りしむること。或知れどその巧拙を論せしむる
 世小少きその紙求むるハ笑ふ。魚子の甚しきことなる
 ばや予ある時清巖和尚法問の語を書き。横物紙
 壁間小掛多る小ある茶人來りて五字七字一行物小
 てほしきなりといり。又阿る時徂來翁の五言一句書れる
 を儒者是を見て云々。惜むべし。何より小文字数少
 くして賞心薄し。詩もてをある文章もそのも。全編
 みてほしきものなり。是その望小表裏ありて異なり
 其意ぬ何なり。也去るべし。予今先輩小聞りある小因

茶より小三害有るを論じて珠光利休の本意を復し茶道の淳素を失はざらん事証祿のよもの

妙語時ふ不遇事

予阿る時翠巖和尚の書きし涅槃妙心の一行物を茶人に見せたる小涅槃とハ死を以てありとて忌み嫌ふる甚し按小涅槃妙心正法眼藏の語ハ禪家第一の心法なりて法華の妙法天台の中道實相浄土の弥陀佛真言の阿字本不生等のごとく此道ゆへ肝要の語あるを茶人の嫌ふゆへなる心より千年丹頂鶴萬歳緑毛龜などの浅俗小近きと日をも同ふして語るべしぞ福壽海無量ハ俗情小喜小(き

語を共讀経小耳をききある故に誰えきりしむわりの予又阿る家を訪ひし小人刀活人劍と書あるを五字一行なりとていやくま古筆家の極をとり裝潢小錦繡を用ひて是紙茶席小掛より主人云武士ハ人を活む者小帶刀ゆるとハよき悟りありとて喜ひ不ろし是ぞ禪家小所謂無心なる者と思ふべきをうかりき此語を書きある禪僧殺の字を落しき様ありころと云ふハ今世の茶人のいきりわをきて姦商を裁きりて巧小裝潢せしものにて殺人刀活人劍の妙語を損壞しある大ひある罪なるべし又予老友池田松石澤菴が書きし應無所住而生其心の一行

を茶人の手より得て大に喜びて云々ハ茶人此意を知らずして買つるハ無所住の語ハ苦心せし故予秘んごらみさしせどもきん遂に予が又購ふ事ハありぬと今其語を按る小自己心小とある所なきを無心と云ふハ天地同小して是即悟道の義なり園の夜ハをぬ鳥のとききれば生きたぬさねの父を戀しきの歌をど同くころりて面白き妙語あるを俗人住家る一とつとて覺えを嫌しむ笑ハ金きの甚しきなるゆゆ

圖樣雅俗好の事

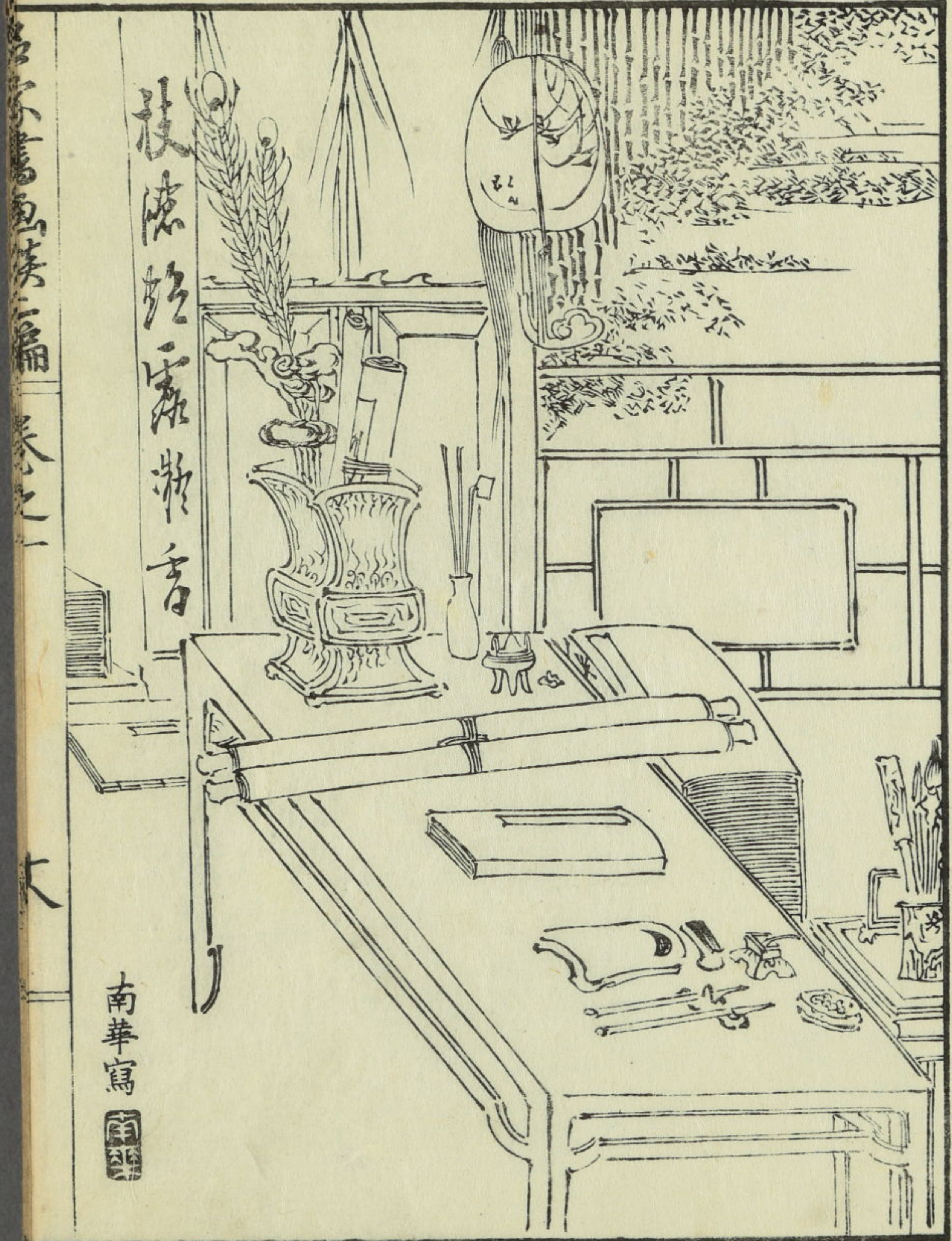
今世畫幅を好者ハ俗字の一行書を好小ひとくして

出来能く是共列仙君子道釋などの像ある圖樣をバウくしとて賞玩すること遠し是ハかの色是小向ハ恐悚の心生むる由一ふきく小柳蓮路鷺鳥の類或ハ陰氣の樹鳥として嫌ハ屈原巢父許由夷齊蘇武昭君などのをバ流さし人或ハ終を全くせざる人ありとてきくハ蟬丸を指者ありとて忌ミ鴨長明瀧の音を聞をえ是小ひとくあそよふとてまじり此人ハ皆後世の規本ある先賢にして尤尊崇すべき故去るも利休古田金森小堀氏乃類つづきの終を全しせざれ共を迷ハ昏迷してころりつづきハ何や一きくあり聖賢道釋或ハ龍席或ハ牛馬杯

各格法ありて精神を窮乏さざりてハ畫くことあり故ニ尤
 肝要とせざる要なき者志多ク一筆の席書一興小楽ト多ク
 戲墨紙を面白トとせざる時ハ孰モ此道紙學びて筆力精
 神をつくはるものある者一百年以前の画三幅對の中ハ道
 釋の圖を画一紙當今の意まで見バ寺院の掛幅のやう
 思はるる理りぞり一先書画好事の法ハ或時ハ聖賢乃
 像を掛て聖賢多しんこと紙欲一或ハ神仏道釋義勇の
 像を各その域ハつらんことを欲一或ハ筆力精神の妙紙
 見てハ已まざる業の不足を歎一或ハ山水花卉の優美紙
 暢然トて養心の術を思ひ或ハ同好の朋を請一茶紙

點トテ雅談小供とする者ト其真意を達バ圖樣百品萬
 物數を以て樂事とする者ト其意を達バ因ハ云當今の書畫
 紙好者そのとる所ハのく義あり左ハ其大畧紙あぐ一

- 一 画を學びて業の巧なるを好者
- 一 鑑定紙好て精神風韻を賞する者
- 一 好事ハ一ハ圖樣の異なる紙その分者
- 一 業の巧拙を不論人物紙愛する者
- 一 畫者ハ不拘飄逸の作を好者
- 一 華美ハ一ハ着色没骨を好者
- 一 灑落ハ一ハ澹泊なるを好者

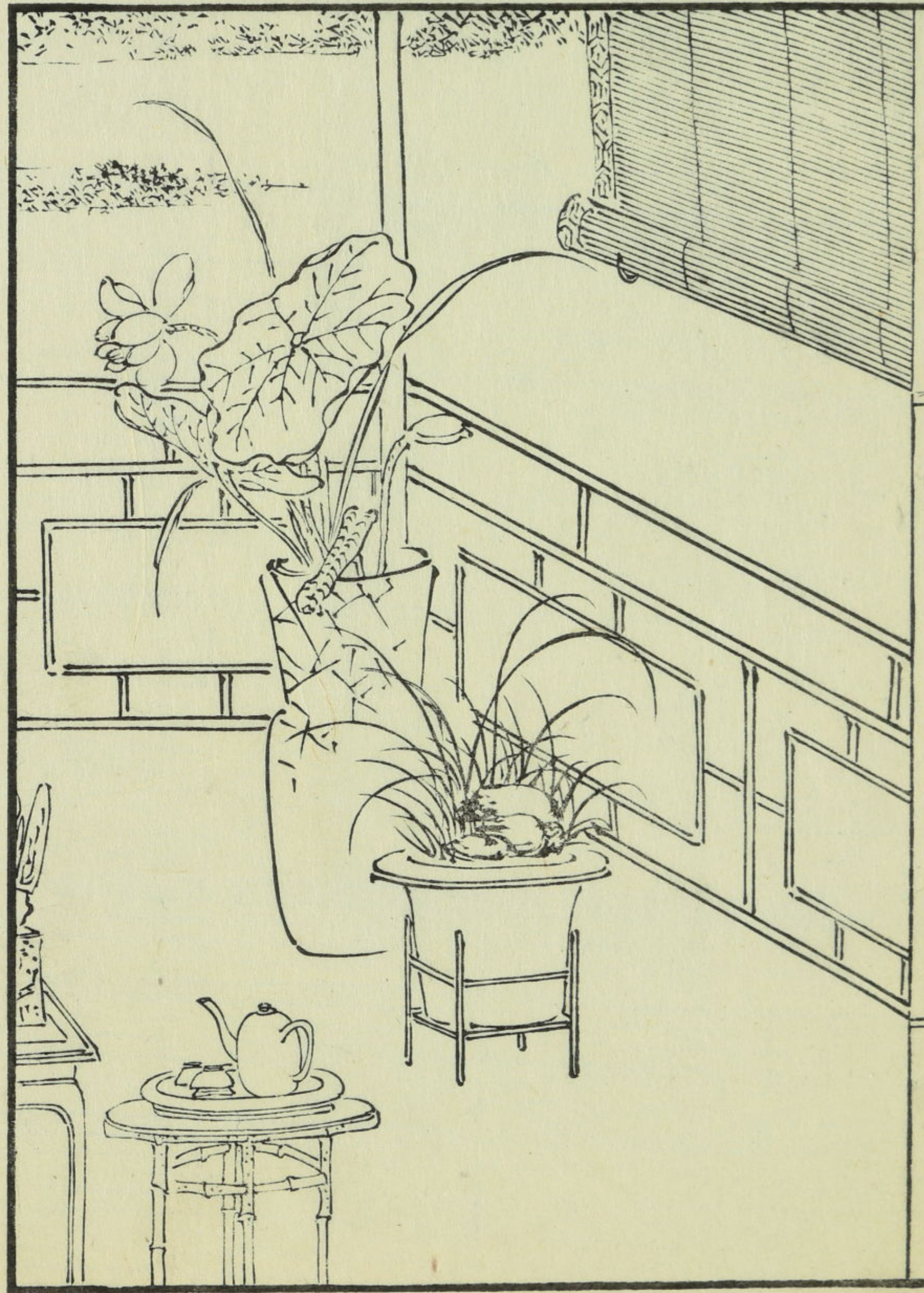


杖履於室漱芳

南華寫



卷之二



卷之二

卷之二

一

右好所の者ハつゞきも実意なり予がごときハつゞき此を
このむふつゞき鳴呼是書画を樂者なりや書画小苦心
はるそのありや

蓮ハ君子の徳小比を泥よりつゞき小染ぞ香氣
高く花葉何ぞやのなり故小宋の大賢周濂溪こそ
越えて愛をる後世を志尚高潔なる者皆この
花を賞観をるハな一竺土小ハもと此花を尊崇
はる故小我朝やも佛像のつゞき小ハ瓶小もつゞき是
越つて祢又ハ寺院の池をど小必こそ色を裁るなり俗意
小ハ此花の佛邊小有越えを死をいつ小心より忌と見ゆ

婦女小兒の見ふして男子を清く徳を修る
氣象なきハ憐む屋きなり因小云豫樂院殿雪舟の画
る雅摩の大幅長二尺八寸横二尺五六寸ハ何ぞも越え度
所圍の床小掛ハ何れもをかる大幅を何れも掛らる
ふやと何れも夜會の茶小掛遊むるなり又四季
各極ハ文を或ハ月日など何れも時節相應小ハ一畫
圖夏ハ冬のみ冬ハ夏の圖越かくることなり何れも
とあり又春の茶の湯會小日寛の葡萄の画越掛ゆ
こと何れも賛小春雨の字何れも越もなりとぞ槐記
が小名公の所為ありやつゞき事を

和歌連俳作意好嫌の事

今世和歌連俳を懐紙或ハ短冊とて賞玩する小先哀
 傷歌或ハ戀歌或ハ述懐或ハ送別の類紙嫌ハ又俳諧發
 句を詞のうらみ忌多る事何と意ある紙嫌ハ
 こそあやむる甚きあり四時循環して暑往て寒
 来り真心の花を盛なるふらむる人紙嫌なき衰するふ
 りりてハ人さうて来どあるひハさうの吹みて雨ふ志不こ
 風ふらむるあはれさ紙思ハ暑の堪うて蚊のうるさむ
 貧き人のやうくふ渡ぐと紙思ハ秋の何れハあづ
 虫小感一ゆも落葉して鹿なく時のうらむくはる海

いづまをあれあはるハあり和歌俳諧の真情といやを即
 うのこぞう貫之朝臣の述ゆハ愁傷愛慕戀その
 所ふいづま紙鬼神紙をうごう猛きばらふて哀まを
 つふこと紙志むる武士の心紙をやうづること何と
 定家卿小倉色紙のうらも七分當今の懐紙短冊好乃
 意ハ合紙の志共歌学者俳諧者流のハハなる
 陋習ハ云ハざることあて皆聲小吠る徒尋常の茶人の風小
 化さすま作意ハ世多小媚多ること紙好ニ紙中の換壞
 多るをバ廢する小多るなり実小たのづりしきことな
 後ハ真跡世小をりて贋作のこの通用とあらんこと

先多とていそと其角が句よ

せめてその貧乏柿小梅乃花

と是况味ある句よまは共俗士ごうしハ貧乏びんがちといふ字あざなは
志るまはちや紙かみが深川ハ貧乏の中とて

米買小雪の袋ふくろやちけり江中

といふ是ハ貧乏ハその句よちり多き共詞の上小何なも
ざればいときとき病やまひことなく人皆是紙かみより二り史し登のぼが

腰ぬらのち小かちひる鳴子丸

といふ腰ぬけの五文字紙忌嫌いひ小なり是も真まこと好このみなる
誰人ハその况味を志りて賞うらやまをまじても俗士ごうしの好このみ小合あはれ

ハ販買はんばいの通用つうようハ遠とほ一其真まこと小好このみなる好このみ字あざなの家いへのなまご世よ小

出でざるらそうここなまま凡たゞそ人ひとハ尊そん歎たん富貴ふき小處ところしてハ世情せじやう

小ららしく哀あはれままといふことことをささり志しること難むづかき故ゆゑ小書か紙

よよこ道みち紙かみ学まなびて人情にんじやうの向背かうはい世事よじの變態へんたい紙かみをささり

ここここ志しることままは詞ことば野鄙やひ小こて逸いつなること何なにもも

小こて感かんずること皆道みなみち小入いることははなり讚さん称しょう慶賀けいがの詞

ハ大抵たいてい皆富貴ふき小こて野逸やいつ小こること感かんずること所ところをを

昔齊景公大國小王多おほくる日ひの長久ながひなること紙欲かみ一死しなること

紙かみのなりこと多おほくること小側こたへ小何なにもも史し孔こう梁丘りやうきう據よ諂たん諛ゆて去い小

泣なみきままハ晏平仲あんへいじゆうハ獨ひとり笑わらて死し生なま去い来きの道理道理紙かみをを

景公大小慙多ひとなり人壽大九七旬と定まきる先五六十ひて足るものありて龜鶴の千萬に羨みて善その三分一をも同しらんは世の中大小いふいふいふいふ人よくその情理を知り安然として生涯をあくりおぼその場ふ及んでは帰路のころとして別に驚くべきをいはむと思はる予いまご之所いふはさまいひつて必ず覺束なり萬物命數ありそのうち人の智ある故に四情深くよく智はて情を制せては古人の龜鶴をよくらぶは長壽を尊ぶるは共に鶴の食は少くして身を保ち龜の氣を吸つて食を飼はるをありと云ふとは人の寡欲なり

て心は浩然と養ふことは人をまる龜鶴の如く從て五十ふて命を終へるは命に前定の數ありと清心省慮て諸欲を制し寡くせば百壽を保ちるは盡きなり近世一茶子が辭世の白とてア、まよ生ては龜の百分といはるるはささりなりなり

墓碑碑帖の事

書は學ぶ者先楷書ハ虞世南廟堂碑顏真卿多寶塔碑家廟碑歐陽詢皇甫君碑九成宮銘柳公權玄秘塔碑等の類を以て善として行草ハ二王帖始として玉煙堂停雲館戲鴻堂より以下諸法帖のぞより小いと備はるべ

篆書八李斯の嶧山碑李陽水の三墳記以て第一の隸書ハ漢碑数百種夏承體ハ一種のその小して曹全碑以て一と也唐碑ハ梁昇卿御史臺銘史維則大智禪師碑を善とい行書ハ李北海雲麾將軍尤佳品とい書法學ぶ者ハ碑刻以て一と法帖佳品ある紙二といべし廣澤翁の以より安永天明間までハ碑本至て稀なり一が文政中新渡船来して今ハ何れも採く志ること紙得たり又和帖墨本正面摺ハ近世予友杉本望雲なるその清法ハ倣い得て尤髣髴より実ハ文墨のひくくる時をまじりと云ふ一志るハ古碑墓碣銘ハ寺院の塔牌ハ等一きそのなる紙

書法學ぬ君子是哉机上ハ排置して和漢同一ハ珍玩を俗士の福祿壽或ハ千年丹頂鶴など紙きてその眼より見ハその身紙晋唐宋元の墓所ハ置ハ似多りと云べし萬卷書開見古人といハ見識を俗意ハよる時ハ生前の人亡人紙友とよるの心といハ一嗚呼雅俗の意懸隔ハくのぬ

真蹟の劣墨刻ハ勝る事

真跡ハ至て稀ハ一又碑帖の及ぶ處きまハ何れも謝在杭云大抵真蹟雖劣猶勝墨刻之佳者といり上古姑置元朝以来趙子昂の書画尤贋作あび多し一明ハいつてハ唐寅吳寛ハ姑置文徵明董其昌の大家贋本幾百種と

つこと諸書よいで世人の知る要なり故小文人雅士真蹟
 の此土小あるべきやうなりと云ふハ理りなり然も其又さ小
 説あり多と之贗げんなりといふ古其時代小して門弟子もんし或も
 能仿よふ者の傳寫でんなり又墨刻の佳なる小勝るものあり
 是ハ手本と云ふ小なる物なまば價小よりて枚まい花げをきり
 たり又墨帖ぼくていといふ贗本多きことハ此道の諸先生小問ひ
 尋て知るたづぬ

米庵先生之説也

書畫臨寫可謹事

附裝潢字義

廣澤先生云米元章其花はな多る王羲之の真跡まこと来禽帖
 の事こと或る曾ま經人用薄紙うす搨書た墨即透す数行仍な汗あせ静

地深可歎息云云又云影書ハ尤大切小と云ふい黄硬紙わうを作
 りて遊あそ絲筆いと紙かみをて明窓めい小向ひて手のきく多る細心さいの人
 寫かきむかと書画ハ尤いくく何いべきいまいなり又云書畫紙
 表具ひょうなる紙裝潢かま装池まとも云ハ四方小縁へりあるの稱なづなり池
 淡あいけなり池ハ四方小堤つあるなりと巻軸まきハ掛物かけ紙
 横よこ小見みる物なまば今の巻軸ハ甚略しんふして書画紙愛あい
 護ごする心小ハかないづいと云ふ

於菟う按あ裝潢の潢紙淡池の義なりと心得て装池共
 つい誤りなるいづい裝潢の潢ハ上声 元來唐の六典小裝潢かま匠
 といふ者何いて即ち今の 官府の表具師ひょうなり潢の字じ

釋名小潢ハ染紙也といひ廣韻小潢ハ染書也といひ
表具の時黃蘗の汁紙をて紙小色紙付ることあり是ハ
蠹虫をとり生ぜぬ為なりとぞ故小六典の註小毛裝成
而以蠟潢紙也と見内後の人新奇の說或考一出して
四方小邊ある故なりと云ハ牽強小近一此より外廢外
集真珠船なりと小委一久辨一多邊ハ併を考ハ廢一

近世名家書畫談二編卷之一畢

